

# 『アンティキテラ 古代ギリシアのコンピュータ』

ジョー・マーチャント 著・木村博江 訳  
2011年11月 文春文庫

専門スタッフ職（食料・環境領域） 廣川 治



『アンティキテラ  
古代ギリシアのコンピュータ』

著書／ジョー・マーチャント  
訳者／木村博江  
出版年月／2011年11月  
発行所／文春文庫

物語は、1900年秋ギリシア、ペロポネソス半島とクレタ島の間にある小島、アンティキテラ島で、海綿採りのダイバーが古代ギリシアの沈没船を見つるところから始まります。ギリシア政府の海軍を動員してまでの作業により、ブロンズ、大理石、陶器の美術工芸品が引き上げられ、その中に、ギリシア文字の書かれた錆びた歯車のようなものが出てきます。時計？ 計算機？ これが謎の中心アンティキテラの機械です。本書第1ページにこの機械がアテネ国立考古学博物館に展示されている様子が掲載されています。この機械の奥には美しいアンフォラ（大きな陶器の壺）が写っています。この機械、メカニカルな美しさはあるものの確かに異質です。

謎解きの中心人物は、プライスというイギリス人科学者、ライトというイギリスの学芸員助手、ブロムリーというオーストラリアの科学者。3人は別々に、X線写真をていねいに読み解き、仮説をたて、実証してみるという粘り強い作業のすえ、真相に近づいて行く……。ただし、これには研究を支える技術の限界がありました。最後は、21世紀にはいり、ドキュメンタリーフィルムの製作をしていたイギリス人フリースが、X線CTスキャンシステム開発チームを動員して解明を進めます。最古のコンピュータか？ 本書を読む限り、副題のSolving The Mystery of The World's First Computerというのは大げさな感じがします。真相は解明できたのかについても、まだ、眠っている真実があるように思います。とはいうものの、私たちの先祖が素朴な

農耕生活をしていたころ（本書ではアンティキテラの機械の製作年

代について、紀元前2世紀と推定されていることを考古学の発達の歴史と合わせて紹介しています）のギリシアの科学技術の高さには驚かされるばかりです。

本書の楽しさの一つは、歯車の謎について数学的な解説をしているところですが、プライス、ライト、ブロムリー3名の個性豊かな人間ドラマも読みどころです。学芸員助手という恵まれない環境で研究を続けたライトに同情。

また、20世紀初頭の海綿採りの話、歯車の開発の歴史、古代の天文学を支えた技術、沈没船と古代ローマの歴史のかかわり（ポンペイウスのギリシア美術の略奪など）と興味尽きないサイドストーリーの豊富さも魅力です。アクアラングの発明者ジャック・クストーもカリプソ号ともども沈没船の再調査に登場しますし、何かと問題の多いスイス人作家デニケン（訳文のまま）がアンティキテラの機械を宇宙人の遺物だとしたことにも触れています。本書の最後尾では、この時代を先取りした技術が、開発された地で忘れ去られた後、イスラム世界で継承されていたことに触れています。組み合わせた歯車に動力をつけた精緻な機械、時計です。時計といえば、今日、我が国の得意技術。2000年の時を経て追いつくことができたようです。